

横浜市立大学学術情報センター

貴重書 月替わり展覧会リーフレット (153)

2024年6月の作品は
『須弥山儀銘并序和解』
—円通の信じた仏教天文学—

展示テーマ

～『須弥山儀銘并序和解』に隠された思い～

仏教とは何か、天文学とは何か。5月の展示ではこんな問いから出発した。円通の熱意から新たに作られた学問領域である「仏教天文学」であるが、その内実は膨大な西洋の天文学と当時日本に興った複数の仏教思想が複雑に絡まったものである。よって解説も一筋縄ではいかない。

今回の展示で取り上げる『須弥山儀銘并序和解』は、仏教天文学の創始者である円通が彼自身の言葉で須弥山儀についてその解説をしたものである。広く天文学を学び、また日蓮宗から天台宗への改宗の経歴を持つ彼の書いたこの書は、数字や天文学の用語を用いて仏教天文学の描く須弥山の内容が事細かに紐解かれ、当時の知識人でもその全てを理解するのは易しいことではなかったことが想像できる。しかし、そんな固い文章の中にも円通の意図がより深く理解できるような記述もあり興味深い。仏教とも相まって神聖化されたともいえるほどの“仏教天文学”を伝えるこの書からは、円通の信じた仏教の存続という後世への希求を読み取らずにはいられない。



『須弥山儀銘并序和解』(2冊)

江戸時代、文化10年(1813年)

作者：円通(1754～1834)

版元：不明

縦25.4cm × 横17.8cm

この書は、円通の「須弥山儀」に付記された漢文の「銘」と「序」が詳しく「和解」されたもので、上・下2冊に分かれている。上巻の冒頭部分には「須弥山儀銘并序」と同じ文章がそのまま抜粋され、その後から詳しい説明がなされている。ところどころに虫食

いや汚れはあるものの、筆跡は癖がなく解説の助けとなる。

表紙には「門外不出」の文字と、それに囲まれるようにして「梵曆護法」の4文字が、さらにその下には「無学庵」、その左右には文中にも登場する「北斗七星」が図で描かれている。「梵曆護法」とは、当時西洋天文学の流入に対して仏教の権威が失われることを危惧した仏教擁護の意思を表していると考えられる。

次に、『須弥山儀銘并序和解』上巻の文章を一部抜粋したものに焦点を当てたい。この一文には円通の須弥山儀制作の意図が著されており、彼の考えが透明化される非常に重要な一文であると思われる。須弥山儀の「儀」は、仏典を開設するという意味ではなく、須弥山を中心とした世界を「象ドル(似せて形を作る)」という意味であり、そのシステムを「法トル(手本とする)」モデルを意味していると考えられる。須弥山を中心とした世界を「須弥界」として概念化し、形のある「須弥界」のシステムを「模造(ウツシカタドル)」ことが、「須弥山儀」の目的であるとしている。

つまり、円通にとっての「須弥山儀」とは、それまで經典の中で文章でしか示されていなかった梵曆の世界を、西洋の天文学の知識と一致するような

見ると、成るほどそれがそもそも象徴的手法を意図していることが窺える。仏教信仰者にとって宇宙観は必ずしも現実に則って語られるべきものではなく、多くの人々の脳裏にわかりやすく、繊細に刻まれる“シンボル”であることが優先された。先も述べたように仏教宇宙観の根底には世界の生成・消滅の永遠の繰り返しという思想があり、そこから仏教の神話性、独断性、図式性を取り除けば、2千年前のこの宇宙観は現代の宇宙観と遠くないものとみることができる。

今日、科学と宗教は相いれないものとしてお互いをそのカテゴリーから排除しようとする傾向にある。一方、今回紹介した仏教宇宙観はまさにその科学と宗教を見事に結び付けた宇宙観である。仏教宇宙観の中の科学をドグマとしないのならば、それを新しいものへ更新することは常に可能である。そして、当時の科学としての“西洋天文学”を熱心に学びまた経典との統一を考えた円通は時代の先駆者と言うべき人であり、その姿勢には現代の我々にとって学ぶところが大きいのではないかと。

参考文献

- ・岡田正彦『忘れられた仏教天文学』ブイツーソリューション 2010年
- ・定方晟『須弥山と極楽 仏教の宇宙観』講談社 1973年
- ・龍谷大学大宮図書館編『仏教の宇宙観』龍谷大学図書館 2009年
- ・禿氏祐祥 編「須弥山圖譜」龍谷大学 1926年
- ・広報「龍谷」2007No. 63「シリーズ・龍谷の至宝『須弥山儀』」龍谷大学 https://www.ryukoku.ac.jp/about/pr/publications/63/05_treasure/index.htm (2023年10月31日最終閲覧)
- ・飛不動 龍光山正寶院「須弥山の詳細」飛不動尊 龍光山正寶院 <http://tobifudo.jp/newmon/betusekai/uchu2.html> (2023年10月31日最終閲覧)

あとがき ～貴重資料に触れて～

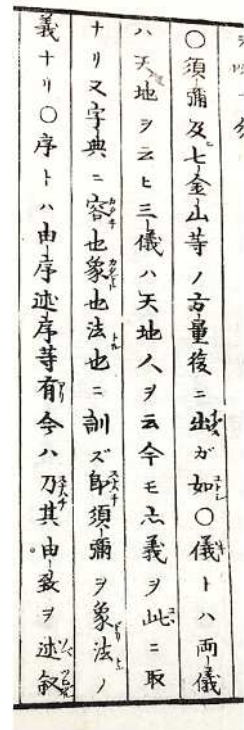
授業を通じて大変貴重な資料に触れることができる良い機会になった。また、仏教天文学という分野は一見マニアックに見えて、実際には仏教の思想や天文学、そして日本の仏教興隆の流れを、時代をまたいで知っていることが前提となっており、膨大な知識が必要とされていると感じた。同時に、この分野において一つの学問領域を作るまでに至った円通の博識さと熱量には驚くばかりである。

※コレクションの閲覧は、作品保護のため、展示品を除き申請が必要です。また利用は学術研究目的に限らせていただいております。
※過去の展示はオンラインでも公開中です！



令和6年6月1日発行
令和5年度日本文化論A受講生 編集
236-0027 横浜市金沢区瀬戸 22-2
横浜市立大学 学術情報センター

第154回展示は令和6年7月上旬からを予定しています。



〈原文〉

○儀トハ 両義ハ天地ヲ云ヒ 三儀
ハ天地人ヲ云 余モ六義ヲ此(ココ)
ニ取ナリ 又字典ニ容(カタチ)也
象(カタドル)也 法トル也ニ訓ズ
即チ須彌ヲ象トルノ義ナリ

形で、また多くの宗教においても共通する形として、ひとつ明確な指針になるような「須弥界」を表したかったものと思われる。その証拠に、文章中には「赤道」や「白道」といった西洋天文学の用語や、当時すでに発見されていた「北斗七星」についての記述も見られ、彼が西洋の天文学にも博識であったことが窺える。

展示のみどころ

～仏教思想と科学～

仏教をある程度、象徴主義によって宇宙観を語るものであるとするならば、我々はそれを欠陥として解釈すべきであろうか。

仏教宇宙観の根底を流れているのは、業と輪廻の思想である。「輪廻」とは迷える世界での生死の繰り返しを意味し、原語の意味に基けば「ともに流されること」、つまり、水に翻弄されて押し流される衆生の姿が現される。仏教宇宙観はまさにこの業と輪廻の姿を明らかにするために説かれている。

今日の科学的根拠に基づいて仏教宇宙観を見れば、その世界像が実際と異なるのは自明のことである。しかし、仏教宇宙観のスケールの大胆さや図式性を